

## 目の特性を知って交通事故を防ぐ

子どもの歩行中の交通事故が最も多いのは、小学校の低学年である。「自宅のすぐ近く」、「安全不確認」による「飛び出し」をして事故にあう傾向がみられる。人間は目から入る情報量が全体の80%を占めているが、子どもは未発達なため、大人と比べてその情報量が少ない。自分の目の特性を知り、見えていない危険を予測する力を身に付けさせたい。

### ① 交通事故とは何か、共通理解しておく。

(02/02)

T:「これは交通事故ですか？」

ペープサートを使い、「人 vs 自転車」、「車 vs 車」、「自転車 vs 車」、「人 vs 車」、「人 vs 人」といった組み合わせを見せながら、交通事故という意味を全員で確認する。人が一人で路上で転倒した場合や、「人 vs 人」の場合は交通事故とは言わないということを押さえておく。



### ② 低学年に交通事故が多い理由を考える。

(04/06)

T:「小学校低学年の子どもが交通事故にあいやすいのはなぜだと思いますか？」

A:「安全なルールをまだ勉強していないから」

B:「走ってしまうから」

C:「油断しているから」

D:「右左を見ていないから」

E:「背が低いから」

③ 安全に歩行するために、自分が心掛けていることを発表する。

(03/09)

T:「どんなことに気を付けて歩くようにしていますか？」

A:「右左を見る。」

B:「自動車を見る。」

C:「信号を守る。」

D:「手を挙げる。」

「見る」という意見を取り上げて、次の目の特性につなげる。

④ 遠近感を感じる。(実験)

(05/14)

T:「目が二つあるのはなぜでしょう？」

T:「2つの方向から見ることによって、奥行きを感じて、近いとか遠いとかがわかります。」

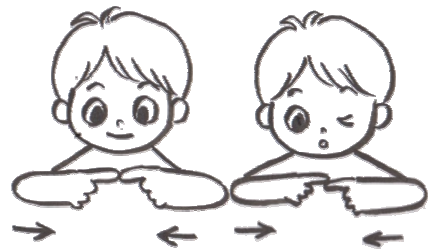
T:「実験してみましょう。顔の前で人差し指と人差し指の先を合わせてみましょう。」

T:「次はいったん両目を閉じて。(10秒たったら)」

それから片目だけ開けて、同じように指の先を合わせてみましょう。」

A:「ずれた！」

T:「2つの目で見ることによって、遠近感を感じて、向こうからやってくる車との距離や、どれくらいのスピードでこちらに近づいてきているのかがわかるのです。」



⑤ 視野を感じる。(実験)

(05/19)

T:「片目だと、見えている範囲は狭いですが、両目で見ると、視野が広がります。」

子どもを前に呼んで見本をさせる。

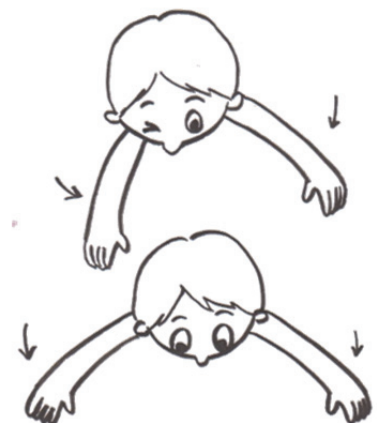
T:「片目を閉じて。横に広げた腕をゆっくりと体の前方へ近づけていきます。自分の腕が見えたところで手を止めましょう。」

T:「次は両目で見てみましょう。」

みんなが体験できたら、大人(担任など)にも前でやってもらう。

A:「大人の方が視野が広い。」

B:「道路を渡るときは、右左に首を動かさないと、やってくる車が見えない。」



さらに自分が走っている状態だと、視野は狭くなることを補足する。  
道路横断時の左右確認の必要性を感じさせる。

⑥ 背の高さで変わる景色を感じる。(実験)

(07/26)

T:「大人みたいに背が高くなったら、見え方が変わるか実験してみましょう。椅子の上に乗ったら、何が見えますか。」

ハンガーラックに布をかけて、向こう側に置いた対象物を見る。

T:「大人には見えているけれど、背が低い子どもにはどうしても見えないものがありますね。」

T:「今のままでは見えていないから、車のかげからやってくるバイクなどに気が付かずにぶつかってしまうかもしれません。身長が足りなくても事故にあわないいい方法はありませんか？」

A:「車のかげになって見えない場所に何かあるかもしれないと考えながら歩くといい。」

危険予知能力の必要性を感じさせる。

視覚だけでなく、聴覚（他に嗅覚や触覚も）に気が付く子どももいる。本時は、取り入れる情報の80%を占めるといわれる視覚に焦点を当てたが、その他の感覚も危険予知能力には必要な要素であることを伝える。

⑦ 集中力がないと見落とす危険を感じる。(実験)

(07/33)

教師は画面のすぐ横に立つ。

T:「通学路で、前の方に知っている子を見つけた(写真①)、そうしたらもう他の周りのものは見えなくなって、その子に向かって駆け出してしまう。(写真②)こんなことはありませんか？」

A:「ある！」

《写真①》



《写真②》



《写真③》



教材ではクリックしてから数秒後に、↑この車が画面下を駆け抜けていく。

写真③の画面を出した後、ペープサートを使いながら、画面から意識をそらせる。

T:「夢中になると、すぐそばに自転車がせまってきたりしても、気が付かないことがあります。」  
(画面から意識をそらせるためにしゃべる)

タイムラグをつけたアニメーションが作動して、画面の中で車のイラストが駆け抜ける。

A:「あ！今何かが見えた！」

不意に画面を駆け抜けていった車に、気が付く子はいたが、視線は前を向いていても、注意していないと見落とす危険を実感できた。今度は意識して画面を見させながら、車を動かす。

KYT ワークシートを配布。画面にも KYT の写真を写しだす。

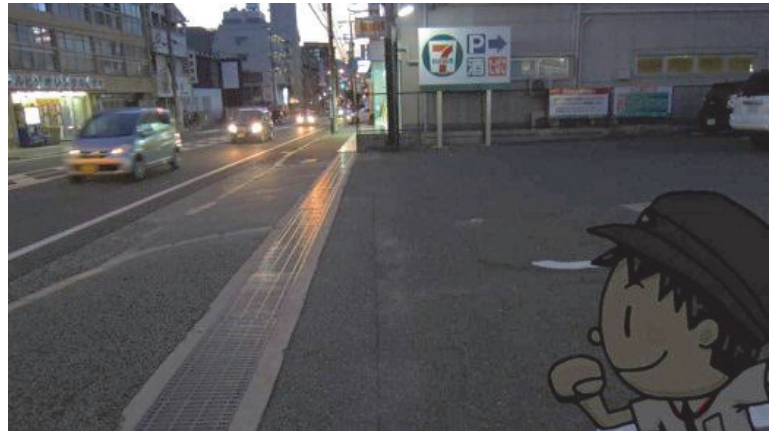
T:「この男の子にこれからどんな危険が起こるか予測して、危険と思う箇所に赤鉛筆で○や矢印などのしるしをつけましょう。」

A:「車道を走っている車が、コンビニに行くために入ってくるかもしれない。」

B:「P は駐車場マーク。ここは駐車場だから、駐車してある車が動き出すかもしれない。」

C:「この男の子がグレーチングで滑って、車道に飛び出してしまうかもしれない。」

D:「向こうから自転車が飛び出してくるかもしれない。」



あたりが薄暗いせいで車から自分が見えにくい状態にあることに気が付く子はいなかった。発達段階どおり、この男の子目線では考えられていたが、車からの目線でこの男の子（自分）の姿を客観視するのは難しい。

写真は夕暮れ時である。暗くなってくると、車から歩行者が見えにくくなることを押さえる。

授業の時期は 10 月頃。本校では 11 月から下校時刻が早まる。その意味にも気づかせる。

A:「いきなり飛び出したりするとひかれるということがわかりました。」

B:「高さによって見える範囲が違ふとわかりました。」

C:「一つのことに集中すると他のものが見えないことがわかりました。」

D:「横断歩道を渡るとき、左、右をよく見て歩かないと交通事故になるんだと思いました。」